

主 題：教会のあるべき姿 : 成長⑤  
 聖書箇所：エペソ人への手紙 4章11節

### テーマ：聖書の教える教会のあるべき姿とは？

ここ数週間、私たちはエペソ4章から教会として成長するということの大切さを学んできました。皆さんの歩みにとって、教会やほかの兄弟姉妹がいかに必要不可欠なものであるかがより鮮明になってきたでしょうか？教会が成長していく上で、私たちひとりひとりが大きな役割を担っていることがよりはっきりと見えてきたでしょうか？そして何より聖書の教える教会のあるべき姿に忠実に従って成長していくことが私たちにとってどれほど重要なことなのか、その理解が深まってきたでしょうか？繰り返しになりますけれども、私たちはキリストにあって一つの神の家族として今を生かされています。そしてそんな私たちはかしらであり、父である主が望まれる教会をみことばに立ってともに建て上げ続けていくのです。救われた私たちはもう自分ひとりで好き勝手に生きる者ではありません。それぞれの思い描く教会を勝手に建て上げていくのではありません。もしそんなことをすれば、どのような結果になるかはもう明らかです。これまでも見たように、性別や年齢、国籍や文化、育ってきた環境も社会的立場も違うさまざまな者がそれぞれの基準や価値観、考え方に基づいて行動を始めてしまえば教会は内側からバラバラに分裂してしまいます。そこには絶対に一致というものはありません。だからこそ教会が一致を保っていくには、その建設者であるキリストの設計図にのっとって教会を建て上げていくことが何よりも大切になるのです。この教会のあるべき姿のシリーズについて考え始めた時に一番最初に見た「わたしは……わたしの教会を建てます。」(マタイ16:18)と言われたこの主の計画にのっとって、私たちそれぞれが与えられた働きをしっかりと成し遂げる必要があるのです。

さて、教会に対する神様のご計画について、これまで4:1-10で少しずつ見てきました。きょうからこのシリーズの後半部分11-16節でその詳しい内容を見ていくのですが、その前にこの11-16節にはある大きなテーマがあることを覚えていてほしいと思います。この箇所には、これまで以上にはっきりとキリストが建て上げていこうとされている教会の青写真が記されているということです。私たちがますます神の家族として成長し、一致を保っていくのに必要な教会のあるべき姿が記されています。私たちがますます成長して行くためには、このみことばに記されている教会のあるべき姿を覚えて、この目標を目指して私たちは走っていかなければいけません。そしてその時にぜひ自分自身に問いかけ続けてください。聖書が教えている教会のあるべき姿とは一体どんなものなのだろう、キリストの望まれる教会を建て上げるにはどんな設計図に従えばいいのだろう、そしてきょう自分はその設計図に忠実に従って成長を目指す歩みをしているのだろうか。

ではまず11-16節をお読みしたいと思います。先ほど言った、キリストが教会をどのように建て上げようとしているのかという問いかけを念頭に置きながら一緒に見てください。

エペソ4:11-16

「:11 こうして、キリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として、お立てになったのです。:12 それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、:13 ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。:14 それは、私たちがもはや、子どもではなくて、人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回されたり、波にもたせられたりすることがなく、:15 むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達することができるためなのです。:16 キリストによって、からだ全体は、

一つ一つの部分がその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです。」

さて、みことばを見る前、ここでの文脈を押さえておくために、先週見た内容を少し思い返してみてください。パウロは8-10節を通して、私たちひとりひとりに霊的賜物を与えてくださったイエス・キリストがどれほど素晴らしいお方なのかを改めて教えていました。パウロはエペソの兄弟たちにあなたたちは賜物が与えられていて、どんな賜物が与えられているのかを考えることももちろん大切だけれども、それ以上に、だれから賜物が与えられたのかを考えてほしかったのです。そして彼が教えてくれていたキリストの姿は、すべての敵に勝利して天に上り、今も神の右の座につかれているそんな王の王であると同時に、みずからへりくだってこの地上に来て、人に仕え、十字架の死にまでも従われた姿でした。この主は最も輝かしい栄光を受けるにのみ値する方でしたけれども、私たちのためにみずからを卑しくし、最も醜く、最も残酷な形でご自分のいのちを捨ててくださったのです。そしてこのような偉大であわれみ深い主が、恵みによって量りに従って私たちひとりひとりに賜物を与えてくださいました。それは、それぞれが主からいただいた賜物を用いて互いに仕え合い、一致を保ってキリストのからだを建て上げていくという目的のためだったのです。

私たちの主であるキリスト——栄光だけをお受けになる、勝利者である方が、私たちのためにこの地上に来て、十字架にかかって死んでくださった。この事実を目の当たりにした時、皆さんはどんなことを思われたでしょうか？主がなしてくださったことに対する感謝だったでしょうか？主がこんなにも犠牲を払ってくださったのであれば、私も喜んで犠牲を払って、主と兄弟姉妹に仕えていきたいという強い思いを感謝とともに持たれたでしょうか？さまざまな思いを抱かれたことだと思います。でもそれがどんなものであれ、賜物がどんなお方から与えられたのかを私たちが理解すれば理解するほど、自分のために賜物を使おうとか、自分は何もできないとか、自分には何も与えられていないとは考えないですよ？こんな主に賜物を与えられているのであれば、私たちの責任は、その主の目的に従って、主と教会とのために与えられた賜物を用いていくことです。

### ○キリストが教会に与えた賜物について

さて、こうして霊的賜物がだれから与えられたのかについて語った後、パウロは具体的にどのような種類の賜物が与えられたのかについて11節の中で語っていくのです。そしてこの11節の中に、キリストが教会が成長していくために持っていたご計画のうちの一つを見ることができます。それは私たちが一致して成長していくために、主は私たち教会に霊的リーダーを与えられたのだということです。これからその賜物の種類が一体何なのか、どのような霊的リーダーが与えられたのかについて私たちは見ていくのですが、その前に二つのことを皆さんに覚えていてほしいと思います。

まず一つ目は、この11節に記されている四つの賜物がキリストが与えた賜物のすべてではないということです。賜物については聖書の中で、このエペソを含め五つの箇所に見ることができます。その箇所についてはレジメに記しておきましたので、ぜひ時間がある時に見てみてください。ここでパウロがあえて使徒、預言者、伝道者、牧師・教師として選んで書いているのは、教会を建て上げていくという目的において、最もふさわしい、特に大切な賜物を挙げているにすぎないということです。

二つ目に、ここに記されている賜物、霊的リーダーが教会に与えられた理由、目的は、彼らによってひとりひとりを整え、霊的に成熟して一致させるためだったということです。詳しいことは来週見たいと思いますけれども、11節の続き、12-13節に「それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。」と書いています。これまでも見てきたとおり、私たちにはそれぞれキリストから賜物が与えられました。私たちは恵みによってそれぞれ賜物を持っているのです。しかし、そんな私たちがそれぞれ整えられて、ますます成熟し、

キリストのからだを建て上げていくために、キリストは霊的なリーダーを特別に与えられたということです。教会には特別に霊的リーダーを与えて、そしてその者たちが働くことによって聖徒たちを整えさせて、「奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げる」ということをキリストは考えておられたのです。これこそが教会が成長していくために主が持っていた設計図でした。

## ☆霊的リーダー

では、主が教会に与えた霊的なリーダー、それは一体どのような存在だったのでしょうか？彼らはどうして教会の成長において重要な存在だったのでしょうか？そのことをきょうもみことばからともに考えていきましょう。

### 1. 使徒

11節を見てください。パウロはそこで「こうして、キリストご自身が、ある人を使徒……として、お立てになったのです。」と言っていました。キリストが教会に与えた一つ目の賜物は「使徒」でした。主は教会が成長していくために、まず霊的リーダーとしての「使徒」を与えられました。でも一体どうして教会の成長のためにこの「使徒」と呼ばれる人物たちが大切だったのでしょうか？そもそも「使徒」というのは一体どのようなものだったのでしょうか？この「使徒」と訳されていることばは「送り出されたもの」とか「使者」といった意味を持っています。また多くの註解書ではこの「使徒」と呼ばれる人物たちは大きく三つの特徴を持っていたと考えられています。

どんな特徴だったかという、一つ目は復活したキリストを目撃した者であったということです。二つ目に彼らがキリストご自身によって遣わされた者たちだったということです。そして最後三つ目に言えることは、この「使徒」たちはいろいろなところに行って語るのですが、自分たちが語ることばがキリストから託された権威あることばだということの確認を与えるために、奇跡やしるしを用いた者であったということです。こういったことをまとめて考えると、この「使徒」と呼ばれる人物は教会を建て上げていくために特別な力を受けて、キリストから遣わされ、神様から与えられた啓示をことばや文字を用いて人々に伝える者たちだったということです。

また皆さんはこの「使徒」ということばを聞いて、まずだれの姿を思い浮かべるのでしょうか？ある人は十二弟子かもしれませんし、ある人はパウロかもしれません。確かにパウロはIコリント15：8-9に「そして、最後に、月足らずで生まれた者と同様な私にも、現われてくださいました。私は使徒の中では最も小さい者であって、使徒と呼ばれる価値のない者です。」と見ることができるよう、間違いなくパウロは「使徒」だったのです。またある人はこれらに加えてバルナバやイエス様の兄弟であったヤコブといった人物のことを思い浮かべるかもしれません。そして新約聖書を見た時に、彼らも確かに「使徒」として扱われているように見て取ることができます。ですから私たちが聖書を見る時に、少なくとも「使徒」と呼ばれていた人物が13人以上だったとすることができます。そして彼らは教会を建て上げるために遣わされ、キリストの代弁者として人々に神様のことばを伝える者だったのです。

また、どうして「使徒」が教会にとって重要な存在だったのかを考える上で、とても大切になる箇所があります。それがエペソ2：19-20です。パウロは「こういうわけで、あなたがたは、もはや他国人でも寄留者でもなく、今は聖徒たちと同じ国民であり、神の家族なのです。あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です。」と言っていました。この箇所は以前も見ましたが、私たちすべての人が主にあって神の家族として一つにされたと書いてありました。それに加えて「あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており」、つまり「使徒」が教会を建て上げていく上でそれを根底で支える土台の一部であったということです。「使徒」というのは、教会が最初に誕生した時にその基盤となるものを築いた人物たちだったということです。このような「使徒」が基盤を築いたからこそ、今私たちのこの教会が存在しているのです。この私たちの属する教会というものが存在しているのは、キリストが「使徒」を教会に与え、そして彼らとその働きを全うした結果だっ

たということです。彼らは土台だったのです。キリストから遣わされた「使徒」たちがいろいろなところに出て行ってみことばを語り、また手紙や書物を記すことで絶え間なく神様のことばを人々に宣べ伝えていました。そしてその結果、教会は成長していったのです。「使徒」というのは土台の部分築く時に大切だった。考えてみたらすごい働きだと思いませんか？彼らの働きは教会の成長においてとても重要なものだったのです。彼らが土台を築いてくれたからこそ、彼らが新約聖書を書き残してくれたからこそ、今の私たちもこうやって教会として成り立つし、また「使徒」たちが残したみことばを学んでいくことができるのです。

## 2. 預言者

また、この「使徒」と並んで教会に与えられた二つ目の賜物が「預言者」でした。「預言者」も「使徒」たちと同じように教会の土台を築くという大切な役割を担っていました。彼らに与えられていた役割は神様から受けた啓示を人々に伝えていく者、キリストの代弁者としての役割だったのです。そのことに関してパウロは同じエペソ3：4-5で「それを読めば、私がキリストの奥義をどう理解しているかがよくわかるはずです。この奥義は、今は、御霊によって、キリストの聖なる使徒たちと預言者たちに啓示されていますが、前の時代には、今と同じようには人々に知らされていませんでした。」と言っています。こうやって私たちが見る時に、「預言者」というのは「使徒」と同じように神様から直接啓示を受けて、それを人々に伝えていく者たちでした。そして彼らは特にそれぞれの地域教会において神様のみことばを人々に伝えることを通して、彼らの益となり、その教会がますます成長していくことを望んで仕える者たちでした。Iコリント14：3で「預言者」がどの役割を担っていたのかが書かれています。「ところが預言する者は、徳を高め、勧めをなし、慰めを与えるために、人に向かって話します。」と、このような働きをしていたのです。新約聖書がまだなかった時、キリストから直接遣わされた「使徒」たちは、あちらこちらに赴いてみことばを語ったり、手紙を送ったりして、神様の教会の土台を築く働きをしていました。でも考えてみると、「使徒」はすべての教会に行って人々を教えることができるだけの人数がいなかったのです。だからこそ神様の啓示を直接受けて、その地域の人々に伝えることができる「預言者」たちが必要でした。「使徒」がいない時に、その地域の教会の人たちが神様の啓示を聞くために、神様からのみことばを聞くために、「預言者」たちのところに行って彼らから聞いていたのです。この「預言者」というのは「使徒」たちとともに働いて、地域教会において人々を教え、教会の基盤を築くという大切な役目を担っていました。

でも、これらの賜物——「使徒」や「預言者」たちが今はもう存在していないことを私たちは信じています。この人たちはもういなくなったのです。それは今はもう私たちの手元に完成したものとして新約聖書があるからです。かつて新約を持っていなかったクリスチャンたちは信仰生活を送っていく上で必要な教えや知恵を毎回「使徒」や「預言者」たちのところに行き行って聞くしか手段がなかったのです。だからこそ教会として成長していこうとすれば、彼らはなくてはならない存在でした。でも今は教会の成長において必要な神様のみことばは、すべてこの聖書の中に記されています。この中に私たちが歩んで行くのに十分に必要なすべての神様の知恵がもうすでに私たちには与えられているのです。皆さんもよく知っているIIテモテ3：16-17に「聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。」とあります。このようにして私たちは聖書が与えられました。だからこそ教会の土台を築いていくという役割を終えた「使徒」や「預言者」たちはもういなくなってしまったのです。

もちろんそうではないと信じている人もいますけれども、私たちはもう存在しなくなったと信じています。その事実を知った時、私たちにも彼らが必要で、初代教会の人たちは私たちよりも恵まれていると思いませんか？そうは思わないですよ？なぜでしょう？かつてパウロの時代を生きていたクリスチャンたちは旧約聖書しか持っていませんでした。彼らは「使徒」や「預言者」たちに頼ることなしには

神様が何を言わんとしているのかを知ることができなかつたのです。でも今は私たちのすべての面において、十分な神様のみことばがもうここに与えられているのです。私たちはだれかのところに行って聞かなくていいのです。私たちがこのみことばを学ぶことによって神様のみことばを知っていくことができます。だとすれば、私たちの責任は、私たちの応答はみことばが与えられていることに感謝をして、このみことばを学んでいくことです。みことばが教えていることにのみ耳を傾けて、その教えに従って生きて行くことです。

こうしてキリストは「使徒」や「預言者」というものをまず教会に与え、教会の土台を築かれました。私たちは今、「使徒」や「預言者」たちが築いたその土台の上に建っているのです。そして彼らが働いて完成したみことばを私たちは今このようにして学んでいくことができます。キリストはこのようにして教会を建て上げていこう、教会を成長させていこうという設計図を持っていたということです。

### 3. 伝道者

続いて、キリストが教会に与えた三つ目の賜物は「伝道者」です。主は教会が成長して行くために「伝道者」と呼ばれる霊的リーダーたちを与えられました。「伝道者」というのは一体どのような存在なのでしょう？「伝道者」と訳されていることばを考えてみると、もともとのギリシャ語の動詞は「よい」ということばと「知らせる」ということばがくっついてできています。また、このことばの名詞形は新約聖書の中で繰り返し「福音」、「よい知らせ」として訳され登場しています。ですから「伝道者」というのは「よい知らせを伝える者」です。この人物について簡潔に言うのであれば、彼らはまだイエス・キリストにある救いを知らない人たちのところに出て行って、福音を宣べ伝えていく働きを担っていた人物だったということです。

またこの「伝道者」ということばを理解して行く上で、ほかの聖書箇所にもこのことばが使われていることを見ることはできますが、実を言うとこのことばは非常に珍しいことばで新約聖書の中で3回しか用いられていません。一つはこのエペソ4：11ですが、もう一つは使徒21：8で、さまざまなどころに出て行って福音を宣べ伝えていたピリポという人物を表現するために用いられていました。レジメにも記しておきましたけれども、この人物は「伝道者ピリポ」と表現されていました。そしてもう一つ出てきたのがⅡテモテ4：5でパウロは「伝道者として働き、自分の務めを十分に果たしなさい」とテモテに与えた任務について表現するために用いられていました。みことばを見る時に、残念ながら「伝道者」に関しては多くの情報を見ることはできません。でもここで少なからず言えることがあります。皆さんに少し注目していただきたいのは、自分の地上での生活がもう長くないことを知っていたパウロが、自分が召された後、自分に代わってテモテが「伝道者」としての働きをしていくようにと求めているということです。パウロはここで自分がこれまでなしてきた働き、自分が全うしてきた役割をテモテさん、あなたが引き継いでやって行きなさい、十分に果たしていきなさいと引き継いでいたのです。それを思い返せば、まさにこのパウロの生き様こそが「伝道者」のそれでした。パウロこそ「伝道者」として生きていたのです。

かつてクリスチャンたちを迫害していた彼が、ダマスコへの道でよみがえった主に出会った時に、主はアナニヤのもとに現れて、パウロの残りの人生について使徒9：15-16で「しかし、主はこう言われた。「行きなさい。あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に運ぶ、わたしの選びの器です。彼がわたしの名のために、どんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示すつもりです。」と述べていました。そしてこのことばどおりに救われた後のパウロは主のみことばを携えて、まだ主を知らない人々のところに出て行きました。彼はそのことで多くの苦しみを受けましたし、多大な犠牲を被りました。でも、彼は福音のためであればどんな犠牲でさえも喜んで受け入れていました。彼は福音を伝えるということが何よりも自分にとって大切なことがわかっていたのです。だからこそ彼はこのようにⅠコリント9：16で言っていました。「というのは、私が福音を宣べ伝えても、それは私の誇りにはなり

ません。そのことは、私がどうしても、しなければならないことだからです。もし福音を宣べ伝えなかったなら、私はわざわざいだ。」、パウロはこの福音を宣べ伝えるという働きのために、自分のすべてを捧げていました。そしてそのためにさまざまな場所に宣教師として出て行っていたのです。福音を宣べ伝えていくということが彼の人生のまさにすべてでした。そのようなパウロの姿を覚える時に、「伝道者」の働きというのは、パウロと同じように、まだ主を知らない、救いを聞いたことがない人々のところに出て行って福音を宣べ伝えるものだと言うこともできます。「伝道者」というのは、あらゆるものを犠牲にしても福音のためにさまざまなところに出て行き、主のすばらしさを大胆に伝えていたのです。

ここで皆さんに覚えていてほしいことがあります。それは「伝道者」の働きというのは、確かにまだ救われていない人のところに出て行ってキリストを語るという大きな役割を担っていました。でもただ福音を伝えてそれで終わりではなかったということです。なぜならパウロはまだ福音を聞いたことがない人にだけ福音を語っていませんでしたよね？彼は救われた者に対して繰り返し福音を伝えていました。今私たちが見ているエペソの手紙も同じことです。パウロはまず一番最初に「エペソの聖徒たちへ」と、エペソのクリスチャンたちに宛ててこの手紙を記し、そしてそんなクリスチャンである彼らに対して1章から3章を通して彼らがどのようにして救われたのかということ、まさに福音を何度も何度も語っていました。またパウロは、エペソの兄弟だけではなく、コリントの兄弟たちに対してもⅠコリント15：1-2で「兄弟たち。私は今、あなたがたに福音を知らせましょう。これは、私があなたがたに宣べ伝えたもので、あなたがたが受け入れ、また、それによって立っている福音です。また、もしあなたがたがよく考えもしないで信じたのでないなら、私の宣べ伝えたこの福音のことばをしっかりと保っていれば、この福音によって救われるのです。」と語っています。

パウロはまだ救いを知らない人たちに対して大胆に福音を語っていただけでなく、もう救われている兄弟姉妹たちに対しても繰り返し大胆に福音を語っていました。彼はどんな人に対しても福音を語り続けていました。どうしてパウロは福音を語り続けていたのでしょうか？それはそうして救われた者たちも間違った考えに走って、最も大切な福音から離れていかないためです。そして何よりも彼らが信仰において成長していこうとする時に、福音というものが欠かすことができなかつたからです。福音というのは救われるためだけのものではなく、救われた後も私たちが信仰生活を送っていく時のエネルギーに、その原動力になるものなのです。私たちは恵みによって救われ、恵みによって生かされているのです。いつも私たちの中心には福音があります。ですからこのことを考える時にまだ福音を聞いたこともない人々のところに出て行って、いわゆる宣教師として伝道する働きをする者、また同時に教会の中で救われている者に対しても、繰り返し福音を語り続ける者、そのどちらも担う「伝道者」の働きがかつての教会においても、今の教会においても必要不可欠なのだという事です。私たちは福音を覚え続けなければいけません。「伝道者」というのは今もそのような働きをしている者だということです。キリストは教会が成長して行くためにこんな「伝道者」を与えられました。

#### 4. 牧師また教師

キリストが教会に与えられた賜物の四つ目として挙げられているものは「牧師また教師」です。11節の最後に「ある人を牧師また教師として、お立てになったのです。」と記されていました。これを読んだ皆さんの中には、キリストはここで二つの異なる人を教会に与えられたのではないかと思われた方がいるかもしれません。ある人を牧師として、ある人を教師として与えたのかなど。そして確かに、註解書の中を見ても、このことばを二つに分けるという考え方があることも私たちは見て取ることができます。でも恐らくここでは一つのものとして考える方が適切だと私は思います。なぜかという、この部分の原文を見ると、パウロはある人を牧師、ある人を教師といったふうに二つに分けるのではなく、一つの定冠詞を前に用いて二つのことばを一つのものとしてまとめていたからです。だから「ある人を牧師また教師」と訳されていました。ですからこういったことを考えた時に、パウロがここで言わんと

したことを簡潔にまとめると、主はご自身の教会が成長して行くために「牧師また教師」という一つの働きをする霊的リーダーを与えられたということです。

ここで皆さんと残りの時間を使って考えたいことは、この「牧師また教師」と呼ばれる人物たちが一体どのような存在だったかということです。私たちよく「牧師」ということばを聞きますが、どんなことを思い浮かべるのでしょうか？「牧師」とはどんな存在なのでしょう？私たちが「牧師」という存在について考えるに当たって、特に大きく三つのことを一緒に考えたいと思います。

#### a) 牧師とは羊飼い

まず一つ目、「牧師」というのは羊飼いだということです。ここで「牧師」と訳されていることばには“ポイメン”というギリシャ語が使われています。このことばは新約聖書の中で18回用いられていますが、「牧師」として訳されているのは実はこのエペソ4：11、1回だけです。そのほかの17回は「羊飼い」や「牧者」と訳しています。そのことを考えると、「牧師」というのはまず何よりも主から与えられた羊を知って、彼らを養い、守り、また導いていく大きな責任を負った羊飼いだということです。でも考えてみれば、まさに私たちの模範であり、羊飼いであるイエス様もそのようなお方でした。イエス・キリストこそ偉大な最高の羊飼いだったのです。主はヨハネ10：14－15で「わたしは良い牧者です。わたしはわたしのものを知っています。また、わたしのものは、わたしを知っています。それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同様です。また、わたしは羊のためにわたしのいのちを捨てます。」と言われていました。「良い牧者」は自分の羊をよく知っています。それは羊を知っていなければ、彼らにとって必要なものを与えることができないからです。だからこそ羊飼いという存在は何よりも羊を知り、そして羊の必要を満たすためであれば自分のいのちを犠牲にすることさえいとわないということです。イエス・キリストはそのようにして私たちのためにいのちを犠牲にしてくださったのです。同じように、教会に与えられた「牧師」の大きな責任は羊を知って、特に教師としてみことばを教え、羊を養い、敵から守り、弱っている者を慰めたり、傷ついている者を世話したり、そういった働きを喜んで担って行く必要があるということです。

#### b) 教会に与えられた牧師、長老、監督は同じ務め

次に考えてほしいことは、教会に与えられた霊的リーダー——「牧師」、「長老」、「監督」という三つのものはみんな同じ人物、同じ一つの務めを指しているということです。言いかえると、教会においてすべての「牧師」は「長老」であり、すべての「長老」は「監督」であり、すべての「監督」は「牧師」なのだということです。そのことは新約聖書の中でもさまざまな場所で教えられていました。例えば使徒20：17、28に「パウロは、ミレトからエペソに使いを送って、教会の長老たちを呼んだ。……あなたがたは自分自身と群れの全体とに気を配りなさい。聖霊は、神がご自身の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、あなたがたを群れの監督にお立てになったのです。」と記されています。この箇所を見てもわかるとおり、パウロはここでエペソの教会の「長老」たちと別れる際に、これらのことばを残しているのですが、その中で「長老」たちに対して彼らが「牧師」として羊を、神の教会を牧する責任を持っている「監督」なのだと教えていました。「長老」ということば、そして「牧」ということば、そして「監督」ということばが同じところに三つ出てきています。同じ人たちの役割として、同じ人を表す表現として使われているのです。

また、ペテロも同じことを言っていました。1ペテロ5：1－2に「そこで、私は、あなたがたのうちの長老たちに、同じく長老のひとり、キリストの苦難の証人、また、やがて現われる栄光にあずかる者として、お勧めします。あなたがたのうちにいる、神の羊の群れを、牧しなさい。強制されてするのではなく、神に従って、自分から進んでそれをなし、卑しい利得を求め心からではなく、心を込めてそれをしなさい。」とあります。ここでもペテロは「長老」、「牧」ということば、そして日本語の訳では「それをしなさい」となっていますが、2017年版では「世話をしなさい」となっていますし、また原語を見れば「監督」しな

さいということばが使われています。ここでも「長老」と「牧師」と「監督」という三つのことばが使われています。

こうやってみことばを見ると、教会の全体を見渡して羊の安全を確保する「監督」、そしてその世話をする「長老」という霊的リーダーが教会に与えられていることを教えています。ここは皆さん大切です。「牧師」も「長老」も「監督」も同じ人物、同じ一つの務めを指しているにすぎないということです。同じ人を指して、その人を「牧師」、「長老」、「監督」と言うのです。ここで皆さんに注意していただきたいことは、パウロもペテロもどちらもこの「長老」ということばに対して複数形を用いていたということです。彼は「長老」と言わずに、必ず「長老」たちと言っていました。つまり教会の霊的リーダーである「長老」はいつも複数であって、教会は独裁者のようなひとりのリーダーがすべてのことを決めていく場所ではないということです。確かに会社では社長やCEOといったひとりの人が全権を握っていますが、教会というのは「牧師」というひとりの人物が教会での働きのすべてを担っていく、すべてのことを決めていくわけではないということです。

ではどうやって決めていくのかというと、霊的に成熟し、聖書が教えている資格を満たしたみことばに精通している複数の「長老」たち、複数の霊的リーダーたちが一致して群れを養い、教会を導いていくということです。だから私たちのこの浜寺聖書教会のことを考えてみれば、今この教会には私を含め4人の「長老」が立てられています。みことばから判断するのであれば、このひとりひとは皆さんにとっての「長老」であり、「監督」であり、また「牧師」なのだということです。そしてこのリーダーシップのもとで私たちはともに成長を目指していこうとしているのです。このようなリーダーのもとで教会を建て上げていく以上、だからこそ当たり前のことですけれども、群れを養い、導いていく責任を持っている「牧師」、「長老」というのはみことばに精通していなければいけませんし、何よりもみことばを教えるという「教師」としての役割が必要です。「長老」の資格には教えるというものが含まれています。羊を十分に養っていこうとする時に、当然霊的リーダーには教師としての役割が与えられているのです。だから私たちが「長老」の資格について、例えばテトス1：9には「教えにかなった信頼すべきみことばを、しっかりと守っていなければなりません。それは健全な教えをもって励ましたり、反対する人たちを正したりすることができるためです。」と記されています。「長老」たちというのは、みことばをもって真理に反対するような者たちを正したり、「健全な教えをもって」自分に与えられた群れを励まし養っていく必要があるのです。教会にはこのような霊的リーダーたちが与えられていて、教会が成長していくために「牧師」、「長老」、「監督」という務めを全うして行く必要があるのです。

### c) 霊的リーダーが与えられたのは人々を整えて教会を建て上げるため

三つ目に皆さんに考えていただきたいことは、教会に「牧師」、「長老」といった霊的リーダーが与えられた理由は、人々を整えて教会を建て上げるという目的のためだということです。霊的リーダーが教会に与えられたことを語ったパウロは12節でこう述べていました。こうやって霊的リーダーが与えられたんですよ、「それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、」と。ここでパウロは教会に霊的リーダーが与えられているその最大の理由は、リーダーたちの働きによって整えられた者たちが働き、教会を建て上げていくということです。教会にリーダーたちが与えられているのは、この人物たちだけが教会におけるすべての働きをしていくことではありません。そのようにはみことば教えていませんでした。もちろん教会のリーダーである「長老」たちも教会における働きに加わって、実際さまざまな場面で仕えていきます。それは私たちに与えられた責任です。しかし、こういったリーダーたちに託された何よりも大切な責任は、教会のひとりひとりにまずみことばを教えて、そのみことばによって整えられた者たちがキリストのからだを建て上げていくことにあるのです。私たちはそのような働きのために立てられています。教会というのは人々がやって来て、みことばが語られるのをただ聞くだけの場所ではないということです。みことばをただ聞いて、だれかが自分に仕え



てくれることをただ待っている場所ではありません。私たちは主から与えられた賜物を用いて、それぞれが主を礼拝し、互いに仕え合っていくのです。

もしこのようにして霊的リーダーが立てられて、彼らが語るみことばによって皆さんが整えられ、それぞれが働きをなしていけば、その教会は間違いなく霊的なリーダーだけが働く教会ではなくて、からだ全体が、皆さんそれぞれが学んだことを実践して、霊的リーダーも一緒になってキリストのからだを建て上げていくような集まりになっていくのです。これがキリストが持っていた教会の成長のための設計図でした。キリストは意図を持って、目的を持って、ご自身のからだを建て上げていくために、まず霊的な賜物を持つ霊的なリーダーを教会に与えられました。そして彼らが忠実に働き、みことばを忠実に伝えていくことによって、そのからだに属するすべての者が整えられ、働き人として主のために働いていく。そうすれば、教会は成長していくのです。神様のすごい計画だと思いませんか？こうやって主は計画をしっかりと立てておられたのです。

### ○まとめ

さて、皆さん詳しいことはまた来週見たいと思います。時間もなくなってきましたのでまとめますけれども、今朝私たちは、キリストが教会に与えた賜物、特に霊的リーダーというものが一体何なのかということを見てきました。主は教会が成長していくために、まず「使徒」と「預言者」と言われる霊的リーダーを教会に与え、彼らの働きによって土台を建て上げました。私たちは今その土台の上に立って、その土台の上を生かされているのです。また主は同じように教会に「伝道者」と「牧師」、「教師」という霊的リーダーを与えられました。私たちはそういった人々の働きを通して常に福音を覚えて、みことばによって教えられ、そのみことばを実践していくことによってキリストのからだをそれぞれ一致を保って建て上げていくのです。私自身、このみことばを今回語ろうと思って学べば学ぶほど、神様が与えられている責任の大きさに圧倒されそうになりました。私自身も、今この教会で仕えている「長老」たちも、霊的リーダーたちも完璧ではありません。でもみことばに従って、みことばだけに立ってますます教会として、また個人個人としても成長していきたいと願っています。皆さんもそのように願われていることだと確信しています。そして皆さんひとりひとりもキリストのからだを建て上げる者として、成熟していきたいと願っているわけです。ですから、ともにこの主が教えている教会のあるべき姿とは一体何なのかをよく考えて、主が求めておられるとおりにぜひとも続けて成長していきましょう。主に喜ばれる教会を目指してともに一致して励んでいきましょう。